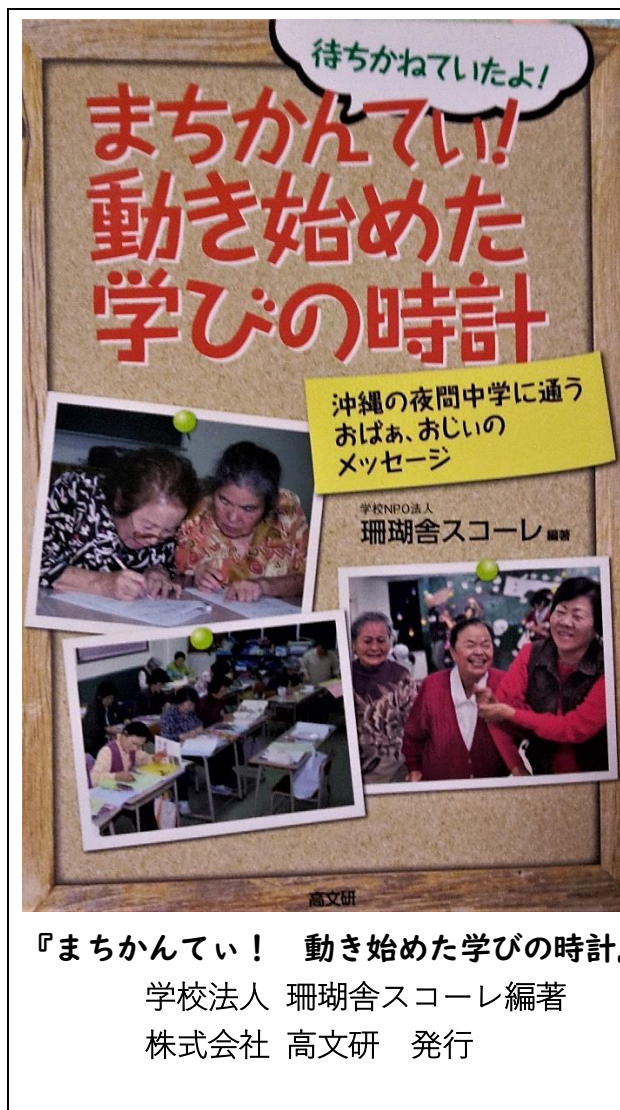


戦争孤児と戦後一沖縄



『まちかんでい！ 動き始めた学びの時計』

学校法人 珊瑚舎スコーレ 編著
株式会社 高文研 発行

沖縄県那覇市の「珊瑚舎スコーレ」の夜間中学校は、沖縄戦や戦後の混乱・貧しさのために、義務教育を受けられなかった人の学びの場として、2004年に開校しました。

2021年4月に南城市に移転し、おばあ・おじいと若者たちがともに学んでいます。

「まちかんでい！動き始めた学びの時計」は、そこで学ぶおばあ・おじいに「夜間中学に通うに至ったいきさつを聞かせてください」と声を掛けて始まった聞き書きをまとめ、2015年10月に刊行されました。「まちかんでい」は、開校した4月の「入学を祝う会」で、一人の生徒さんが、「まちかんでいしてたさあ（待ちかねていた、待ち遠しかった）」と話した言葉からとったとのこと。

子どもの時、学校で学ぶことができなかった皆様の過酷な境遇・体験と、ようやく学びの場を得た喜びを語る貴重な58本の聞き書きが収録されていますが、許可をいただいて、その中から特に、凄惨な沖縄戦のただ中を生き抜かれた「戦争孤児」等の皆様の体験を、ご紹介させていただきます。（原文を横書きに、数字は算用数字にしました。）

* 赤ちゃんが騒ぐので殺そうかと大人たちが相談していた

◆A・Yさん(女性 1937年生まれ)

新聞で知りました。東京で仕事をしていて、たまたま帰郷したときのことで、その記事を切り抜いてありました。70歳まで働いて沖縄に帰ろうと計画していました。2005年に久茂地のデパート前で夜間中学の署名活動に出会い、入学をお願いしました。

小学4年生の終業式の前日に空襲にあい、家を焼かれ、捕虜になるまで逃げ延びました。明日着ていくセーラー服を用意していたので、その日が3月25日だと、今も覚えています。学校にきちんと通ったのはこれが最後です。父が防衛隊にとられていたので、義母とおじい、おばあと一緒に逃げました。大里東風平の壕を転々としました。おじいとはぐれたのは、艦砲射撃の合間をぬってカー（井戸）に水を汲みがてらに足を洗いにいった時です。先に壕へ帰ったものと思って戻ってみると、いませんでした。母の足が弾で貫通したのもこのころです。並里という民家に大きな自然壕があり、たくさんの方が入っていました。

しかし、ここも日本兵の上からの命令で、夜の8時までに出ていくように強制されました。畑の道を隠れながら逃げます。私は頭に水汲み用の歯釜を2つ被っていたので、釜が触れ合っ

このころになるとアメリカ兵は探知機で探し出すと言われていて、ある壕の中で1歳ぐらいの女の子が騒ぐので殺そうかと、大人たちが相談をしていたのを聞きました。食べ物はほとんどありませんでしたが、飼い主がいなくなった牛や馬を大人が解体した時は、大変なご馳走だったと記憶しています。おじいに次いで、おばあとも井戸の水汲みで離れ離れになりました。井戸に人々が大量つめかけて争って汲んでいました。おばあは歯釜で汲み、私は一升瓶です。小さいので大人に突き飛ばされて井戸に落ちたところを、男の人が引き上げてくれました。そうこうしているとおばあは姿はありませんでした。私が汲んだビンの水は十数名で飲みました。

6月21日、捕虜になりました。アメリカ兵が銃を構えているのが見えました。老人は殺さないだろうということで、年寄りを先に立てて壕から出ました。振り返ると、自分たちは隠れているつもりでしたが、風呂敷包みの荷物が壕の前にあり、丸見えでした。トラックに乗り知念の収容所に入れられました。

半年ぐらいして青空学校が始まりましたが、ちゃんとした勉強はできませんでした。親戚を頼って地元に戻りましたが、父方の叔母に引き取られ、いろいろあり学校には行きませんでした。中部にある軍のレストランで働くようになり、それ以後は自分の力で生きてきました。ただ、勉強していないということは生活上、仕事上困ることがたくさんありますが、それ以上に人前では控え目になりますし、ひがみが出ます。

夜間中学は楽しいです。好きな教科は英語です。シンガポール生まれということと、青空教室の時に地面に竹で自分の名前をアルファベットで書いてもらったことが忘れられないからでしょうか、親近感があるのです。



* 妹は米兵に連れられて行ってそれっきりでした

◆G・Kさん(女性 1932年生まれ)

友だちから「夜間中学があるってよ」と聞いてはいましたが、探しきれなかったです。卒業式のことを新聞に大きく載りました。それを切り抜いて探しました。たくさんの方が集まり、いろんなことを知っている銀行に行って聞いたのですが分かりません。赤十字の看護婦さんが那覇署の近らしいと教えてくれて、その近くで弁護士事務所を開いていた人に聞いたら分かったんです。歩いて10分程度の近くにあったなんて。「あと2人しか空きがありませんよ」と言う時に申し込んだんです。やっと学校に行けると一安心しました。

父は兵隊にとられ、早くに戦死しました。小学校3年の秋に大規模な空襲があり、南風原に移りました。年老いた祖父母、母と兄弟3人と長女の私、下の妹は2歳でした。この家族では北部のやんばるに疎開することもできず、結果最悪の戦場になった南部に移ったのです。激しい戦闘と一緒に南へ南へと逃げ回りました。

途中、祖父ははぐれて行方不明になり、母は流れ弾で足の骨が見える怪我をし、歩くのが困難でした。私が下の妹を背負いながら進みます。水は井戸にカンカラを垂らして汲み、食料は他人の畑に残っている芋をあさったり、ソテツの実を食べたり、最後の方は木の葉っぱまで食べました。よその大人にくっついて芋探しに行くのですが、子どもは足手まといにな

るからでしょう、嫌がられました。食べ物を持っている兵隊も、くれるはずもありません。あの人たちも国を守ろうとしてきて、想像もしない苦勞をしたと思いますよ。

知念で捕虜になりました。2歳の妹は栄養失調で木の枝のような手足になり、米兵に連れられて行き、それっきり会うことができませんでした。ずいぶん探したのですが見つけれません。

その後、与那原に住むようになりました。夜は一家の食べ物を探し、海水を煮詰めて塩を作り、半日歩いてまきを拾う毎日で、学校のことを気にしている暇なんてなかったです。

世の中が落ち着いてきて、元々あった地所がはっきりしたので、弟と一緒に自分たちで畑を作り始めました。大きい芋は売り、小さい芋は自分たち用です。那覇まで売りに行くのですが、安くても途中で買ってくれる人がいると、儲けがなくてもうれしかったです。

14歳ころに一度、菓子屋に奉公に出ました。お金は入るのですが家のことができず、みんなの暮らしが成り立たず、1カ月で辞めました。それからは畑仕事中心です。

21歳ころ、母の知り合いから結婚を申し込まれました。その人は大学まで出ているので無理だと断りましたが、その人のお母さんから「学校は学校、人は人。あんたを見て結婚するんだから」と言われ、納得しました。6人の子どもはみんな大学まで出しました。

子どもが自立してここ10年ぐらい、今からでも勉強をしたいと強く思うようになりました。夫は「100歳になっても、あっちに行くまでは勉強したらいいさあ」と応援してくれます。

五十音をきれいに書くのが夢です。とっても楽しいし、おもしろい。エンピツを削るのも楽しい。先生から目が離せないんです。家計を切り盛りしているんですから計算はできますが、それを式にしていく、式の書き方すら楽しい。

昨晚も帳面を広げました。そして体育で習った空手の型を夫に見せました。学校で習ったことは、家に帰っていろいろ話すんですよ。それがまた楽しい。



* みんな人間じゃなくなる。人は自分だけは生きようとする

◆ T・Eさん(男性 1935年生まれ)

珊瑚舎の隣に給油所があるさあね。あそこは先代の時から使っているの、「あっちは何するところかね」と聞いたら、「いろいろしているみたいだよ、歌も唄っているよ」と言うので興味をもったんです。出来るものは何でもやってみようと思っていましたから。下の看板を見て電話をしたら、来春しか入学できないと言われ、この4月から通うことになりました。

学校は小学校4年生の途中までです。父は軍属(軍人でなくて、軍に所属していた)で、満州で亡くなりました。母は私を連れて再婚しました。その義父も沖縄戦で亡くなりました。父というものに縁がないんですね。再婚して2人の妹がいましたが、戦争が激しくなり、母は上の妹を他の所に預けることにし、その帰りに艦砲射撃の弾を胸に受けて亡くなりました。私は仲間とヤギの草刈りにでかけている時、耳が壊れるほどの射撃音がしました。母の死を知ったのは1週間ぐらいたった後でした。残されたのは生後3カ月の妹と私だけです。

艦砲が激しくなり部落の人たちと壕に隠れるようになりました。赤ん坊は泣くので米軍に

見つかる、首を絞めて殺せという声が出ます。手をかけるなど出来るはずありません。妹を抱いて壕を出たものの行き場がありません。墓を見つけて身を隠しました。墓場の前にある茶碗にたまっている水を、手ぬぐいの端に湿らせて妹の口を濡らしてやりました。夜、芋を探して柔らかくし、その煮汁を飲ませましたが、下痢がひどく日に日に妹が小さくなっていきます。切なくて切なくて、あの世があるならあの世に連れて行ってほしいと何度も祈りました。

墓の中に2人きりです。せめて幽霊でも来てくれたらと思いました。あの世もなければ、幽霊もいないんです。1カ月ぐらいして見る影もなく小さくなって、妹は亡くなりました。

みんな人間じゃなくなる。人は自分だけは生きようとする。自分のためには他人の子どもを差し出すんです。人の醜さもよく見えるし、情けもよく分かる。今になってもダレに何を言われたか、全部覚えています。ある女の人に、あんたの母さんに世話になった。出るものならおっぱいをあげたいけど、子どもを産んでいないのでおっぱいでないさあ〜と言われました。恩は口に出さず、一生かけて返すものでしょう。

捕虜になった後は、縁者のもとでウシ、ヤギを飼う仕事をしました。学校に通っていた同級生が、「この字読めるかー」とからかってきます。古い辞書が家にあって、それが私の先生になりました。青年会に誘われて行ってみると、いきなり書記です。120名くらいいるみんなの名前を辞書で調べて勉強しました。

昭和50年ごろ、自分の小学校の脇にある中学校の校長に会い「卒業証書をくれ」と言ったら「入学していないからない」というのです。だから言ってやりました。「ないから貰いにきた、あったら貰いにこない。証書をくれたらいろんな試験が受けられる。それで私の一生が左右されるんだ。ぜひ出してくれ」と。校長はすごい人が来たと驚いたようでしたが、卒業証書を出してくれました。

それから土木、建築の資格をいっぱい取りましたよ。那覇に出て、10年はかかるといわれた棟梁の仕事を3年でできるようになりました。ある時、鶯張りの廊下の仕組みを知ろうと、京都の知恩院を訪ね、柱の作り方を見るために廊下の下にもぐって調べていたら、爆弾を仕掛けようとしたと疑いをかけられ、交番で3時間も尋問をされました。その後、二条城にも行きました。ここでも疑われたので、知恩院に問い合わせしてくれと頼んだら、ここは半分の1時間半で終わりました。我ながら笑ってしまいました。考える、研究するのが好きなんです。

夜間中学は楽しいねー。同級生はみんな頑張ってやっている、その学ぼうとする姿、雰囲気は上等だね。先生も真剣に教えてくれる。ただ、先生に頼っているといずれ分からなくなる。自分でやらないと、学校に通ったというだけになってしまうから注意しないと。

「あいうえお」もバカにできない。書けるからいいんじゃない、自分の癖字を直していい字にすることが大切だから、家では仮名を練習しています。英語はかつて米兵と「マイオンリー」などと歌っていたので、多少できると思っていたら全く忘れていた。それこそA、B、Cからだね。



* 生きのびた私は“カンポーヌクェーヌクサー”です

◆K・Sさん(女性 1934 年生まれ)

テレビで知りました。連絡先をテレビ局に問い合わせました。早速連絡すると「編入もできますよ」と言われましたが、体調に不安があったので、この春まで待ちました。

戦争の時、私は小学3年生でした。家の近くには大きなガマ（壕・自然洞窟）があり、どんな爆弾が落ちてでも大丈夫だと思っていました。10月10日の空襲のあと那覇からの避難民も増えました。新聞には毎日、友軍はものすごく強く、敵機を何十機も落とし、軍艦を何百も撃沈したと載っているそうです。でもカンポー（艦砲射撃）や爆弾は日に日には激しくなり、ガマから出られる時間が少なくなりました。

母は「もうここはだめだ」と南部に逃げることにしました。父は防衛隊でいません。島尻（本島南部、住民が追いつめられた激戦地）に行く道々に死人の数が増えてきました。5歳の妹が歩けなくなったので荷物を半分捨て、妹を背負うことにしました。道端で死んでいる兵隊のゲートル（軍靴の上から布を巻き付けたもの）をはずして繋いで帯を作りましたが、はずすのが大変でした。私が片足を持ち上げて、母がはずしましたが、片足が重くて靴のかかとも持ち上げたときにポロッと腐った足が抜け、ウジが顔まで飛んできました。

泥水を飲み、あらゆる草を食べました。井戸に向かって歩いていた時、低空の飛行機からの射撃で、人がパタパタと倒れ井戸の中にも落ちます。でも皆、水を汲むのに必死で、倒れた人を押しつけて血の滲んでいない処から、水を汲んで逃げます。死人の山、水、水と言いながらもがいている人、ただ、呆然と傷口のウジを木の小枝で取っている人。死んだ母親の背におぶされながら子どもが泣いています。私の友だちは臀部をもぎ取られて置き去りにされ、畑の中ではいつくばりながら私の名前を呼び、水をせがんでいます。でも私の持っている水は、妹のために取っておかなくてはならないのです。

その後、摩文仁で怪我をした父に会いました。皆行き先は糸満。誰かが浜伝いに「国頭突破」（南下してくる米軍をかいくぐって北部の国頭方面に逃げる）をしようと言いだし、夜を待って喜屋武浜に下りました。海で死んでいる人はきれいで、色が白く太っていました。

女1人で子どもを3、4人連れているお母さんは、下の小さい子を残して行くのです。2日前に生まれた赤ちゃんと2歳の子を置いて浜に下りようとした時、「アンマー、アンマー」（お母さん、お母さん）と泣きながら、ついて来ます。そのお母さんは「あんたはボーボー（名前のない赤ちゃん）と一緒にいて」と言い、ちょっと押し返そうとしたら崖からころげ落ちていきました。

翌朝、戦争は終わったとのビラがまかれました。信用しないままに行き、捕虜になりました。シラミ対策のDDTで真っ白になり、傷の手当てを受けて生きのびた私は、“カンポーヌクェーヌクサー”（艦砲射撃の生き残り）です。

戦後はマラリアの熱と闘うことと、遺骨収集から始まりました。同じ町内の人は摩文仁の1カ所に集められました。学校のテントを張ろうとするのですが、遺骨がバラバラとあります。大人たちの姿を見て、子どもたちもテントをモッコにして自然と集めるのです。そこは今「魂魄の塔」が立っています。しばらくして、元の町に帰りました。

戦争で父が怪我をし、それを補おうとして母が病気になり、学校どころではありません。

父は母と妹のために畑 100 坪と乳ヤギ 1 頭とを交換して、その日その日の生活で精一杯でした。

私は菓子屋に子守り奉公にでました。子守だったのですが、朝 3 時に起きて、その日の菓子作りに使う水をつるべ井戸から汲み上げ、職人のご飯を作ります。配達をして残った菓子は、町で立ち売りをします。でも苦労だとか自分を哀れむ気持ちはまったくありません。給金で一家が食べていけるのです。

年季が明けてからは自分で商売をしました。行商です。ガム、素麺、コンブ、するめ、こんにゃくなど何でも売りました。郊外で売り、帰りはそこから大豆を買い、街の豆腐屋に売ります。やっと人並みの生活が出来たようになったら母が亡くなりました。その後結婚して、4 人の子どもを育てました。

勉強ができなかったことはいろいろな場面で苦勞です。以前は役所には代書屋がいたのですがいなくなり、自分で記入するのですが、係の方から「あなたの名前の漢字はこれでいいのですね」と言われドギマギします。カタカナでしか書けないので、自分の名前の漢字すら分からないのです。また着付けの教師になっても実技は良いのですが、教室の生徒の名前が書けないのです。ボランティアをしたいと望んでも、アンケートの記入が出来ません。

夜間中学に入ろうと思ったのは勉強したいのと同時に、同級生と呼べる友人が欲しいからです。そして、生涯に一度、卒業証書を欲しいのです。授与する場面に立ちたいのです。夫に話したら「お金と同じで、あの世に習ったものを持っていくことはできないよ！」と言うので、「極楽に入る時に試験があるかもよー」と言って 大笑いをしました。

学ぶことは何もかも初めてで、とても楽しいです。これまではエンピツはドラム缶より重いと思っていましたが、今は軽くなりました。



* 生まれた日が分からず 6 月 23 日を誕生日とされました

◆H・Yさん(女性 1937 年生まれ)

壕と言うより、岩かげにゴザを掛けて潜んでいたら米兵に見つかり、いきなり殴られたようなショックを受けました。母と私、妹、いとこの 4 人です。

いここはここで死にました。母はタンカに乗せられて運ばれたのですが、目を開いていたので生きていたと思っていました。母とはそれっきりです。

妹は足に怪我をしており歩けませんでした。米兵に抱かれてトラックに乗せられ、着いたのは宜野座の孤児院でした。妹は怪我の他にひどい下痢をしていて、私が学校へ行っている間に病院へ移されていました。今思うとあの下痢は、沖縄で言うスブイワタ（赤痢）だったと思います。しばらくして伯母が病院に行ったら、妹はもう居なかったそうです。

妹ともそれっきりです。未だに、ひょっとしたら妹がどこかで生きているのではと考えることがあります。

私は広島や長崎に行っても原爆資料館に入りません。入らなくても想像できますし、苦しくなるだけです。

大きくなって運転免許をとったのも、母の遺骨を探すためでした。でもあのころとは、地形が変わって、いまだ探せません。

孤児院から母方の祖母に預けられました。小学校2年生になりましたが、学校は勉強どころではありません。ほとんど校舎作りです。地面の上に草をかけただけの校舎とも呼べないようなものでしたが、連日草刈りでした。台風ですぐ飛ばされるので、その修理も大変です。薪拾いも日課でした。栄町のチリ捨て場を探し回ったものです。

教科書もなく、黒板を写すだけでした。九九を習ったことだけは覚えています。

イラクはテレビで見る限り屋根がありますが、アフガニスタンの様子は沖縄のあの時代にそっくりです。

小学校5年の時、先生に誕生日を書くように言われましたが、わかりませんでした。祖母に聞いたら祖母も知りません。仕方がないのでその日、6月23日（沖縄慰霊の日）を誕生日として生きてきました。

小学校6年でお手伝いさんになりました。給料はすべて祖母の手に渡ります。それでも家で祖母にこき使われていたことを思えば、楽なものです。孤児院に置いておいてくれたら、中学校ぐらい卒業できたらうと何度も思います。

18歳でパーマ屋の見習いになりました。免許をとるには試験を受けなければいけません。学校を出ていないことがこんなに大変なことかと知らされました。問題集をとにかく丸暗記するしかありません。

このころ、祖母が亡くなりました。天涯孤独、一人ぼっちです。父は戦争中はハワイにいて、帰ってきた後は再婚をしたので、親子の関係は一度もありませんでした。

20歳でプラザハウスに就職しました。そこのお客さんに教えられてライカム（米軍施設）の試験を受けました。学校を出ていないので自信がありませんでしたが、面接と実地だけで受かったのです。私とマニユキアガールと2人1組で仕事をします。予約制で米軍関係の家族が客です。シャンプー、パーマ、セットを1人でやるので、やりがいがあり楽しかったです。

ただ女1人で住んでいるので、男たちがうるさくてたまりません。結婚すればこうしたこともなくなると思い結婚しました。そうでもなければ結婚はしなかったと思います。人が怖く、信用することができません。

主人は勤め人でしたが、2階に15人の下宿人がおり、子ども3人を抱えてその賄いにあけくれる日々でした。姑が山ほどの借金をつくり、亡くなってからはその返済がたいへんでした。夫は家庭を省みない人で離婚しました。子どもの籍は夫の方ですが、育てたのは私です。

その後はビルの管理人などをしながら生きてきました。自分のことを考えると子ども、特に娘には1人でも生きていけるようになってほしいと思い育てました。

大リーグの野球中継が大好きです。いつもは野球を見るのですが、あの日ひょっと夕方のニュースを見ていました。そしたら夜間中学のことが流れました。「あーこれだ」と思ったのですが、あわてんぼの私ですから1日待って、自分の気持ちを確かめて電話をしました。1度、県に夜間中学のことを問い合わせしましたが「ありません」のつれない一言でした。

遅れているので休まず通うつもりです。英語ができるのがうれしいですね。読み書きができるようになったら、FAXで意見や感想を送れるようになりたいのです。



* できることなら遺骨を魂魄の塔に入れてあげたい

◆M・Tさん(女性 1933年生まれ)

珊瑚舎のことはテレビで見ました。長いこと体調が悪く病院に通っています。病院の先生に夜間中学のことを話したらすぐ事務の人が調べてくれて、ここを教えてくださいました。読み書きができないのでバカにされ、引っ込み思案な人生を過ごしてきました。読み書きができるようになれば、自分でも人間みたいな生活ができるようになるとおもいます。

両親と兄2人、私、妹の6人家族です。戦争は小学4年の時に激しくなりました。首里からやんばる(沖縄北部)に逃げようとしたのですが、あっちに行け、こっちに行けと言われて島尻(沖縄南部)まで流れていきました。艦砲射撃が激しく何十人もの死者を見ました。

具志頭の壕で父と次兄が亡くなりました。妹が小さくてどこも入れてくれなくて、壕から墓、墓から壕と移っている途中でした。1本の木があればその木の陰に、用水路のコンクリートの蓋があればその中に頭を突っ込んだりして逃げていました。兵隊さんの中には「もう少しで勝つから頑張れ」と声をかけてくれる人もいました。母は破傷風で亡くなり、妹は片方の乳房を失い、私は艦砲射撃の破片で頭を痛めました。いまだに頭を押さえると痛みます。

捕虜になり戦車に乗せられて、船で宜野座の病院に入りました。その後、病院に併設されていた孤児院に入りました。母から妹を離すなどと言われていたので、妹を守るのに必死でした。長兄は防衛隊でしたが、二見(北部)でマラリアに罹ったと聞いたきりで、その後を知りません。

怪我をした兵隊さんは、傷痍軍人として国から手当てが出ると聞きました。でも、戦争で怪我をした妹にも私にも、何も出ません。後遺症に苦しむ私たち姉妹になぜ国は何もしてくれないのか、納得がいきません。

私は叔父さんの家に、妹は叔母さんの所に引き取られ、別々に暮らすようになりました。そんなある日、叔母さんは「妹をよそにあげた」と聞きショックを受けました。たった2人きりの身内です。離れて暮らしていても、親戚の家なら様子も分かるのにと抗議したかったのですが、世話になっている身では声を上げるにも遠慮です。

でも、妹が帰ってきたんです。引き取り先で大鍋に湯を沸かして妹を風呂に入れようとしたらしいのですが、妹はびっくりして裸で逃げ帰ってしまいました。その時の気持ちは、安心したとかうれしいとも少し違います。あっーと胸の底から声が出ただけです。その後は姉妹一緒でしたが、親戚をたらい回しにされました。

首里に孤児院があり、入れて欲しいと頼んだのですが、保証人を連れてこいと断られました。

叔父さんはまあまあ良い人でしたが、そこの娘が意地悪でした。叔父さんが馬車を引いて出かけると、学校に行くふりをして帰ってこいと言われていました。仕事は牛の世話と畑仕事です。夜、ランプも使えないので宿題もできません。次第に学校にも行かなく、いや行かせてもらえなくなりました。

18歳で那覇に女中奉公に出ましたが、楽だと感じたくらいでした。軍作業やハウスマイドも経験しました。

結婚しましたが、親に育てられていないせいもあり、いろんなことがチャースガー(どう

しよう)ばかりでした。体調が悪くまともに動けない状態の中、お舅さんがガンでも、その世話が出来ないありさまでした。親戚たちからは面倒みるのを嫌がっている、怠けていると言われましたが、引っ込み思案でうまくモノも言えず、ビクビクして過ごしてきました。

読み書きができれば、堂々と生きることができずし、親孝行もできます。家族の遺骨をお寺に預けてありますが、戦争で亡くなったのですから一緒にして「魂魄の塔」に入れてあげようかと考えています。それも読み書きができるようになれば書類も書けるはずです。(注:現在は納骨することはできない)

こうやって夜間中学に通っているのがウソみたいな気がします。幸せです。人の中に入ることもできず、ましてや話もできない。そんな自分でした。今は同級生がいてみんな笑顔なので、安心して勉強ができます。国語の読み書きができるようになりたいのが願いです。答えが合えば算数も楽しいです。ウチナー(沖縄)の歌や三線を知らないのですが、みんなと一緒になら好きになれそうです。

夜間中学は時間をかけて教えてくれるので、ありがたいです。



*「お前なんかヤギ小屋で寝ろ」と小屋に叩き込まれて何日も眠った

◆M・Uさん(女性 1940年生まれ)

珊瑚舎のことは何度もテレビで見たので知っていたんだけど、「あー」と思って電話番号を書き留めようとする、もう変わっているんだよね。それに字を読めない自分にとって、画面を見てメモするのは無理だった。それで友だちに「与儀公園の方のはずだから探して欲しい」と頼んだの。そうしたら友だちが、「いつも行っている銀行の上がそうらしいから行ってみよう」と言って連れてきてくれたんだよね。

自分は字が読めないから、知らない場所に行くのは怖い。だってエンピツを持つのも^{だま}ここが初めてだもの。一生懸命に働いてお金を貯めたのに、保証人や何やらいろんな人に騙されて、苦勞ばかりなのも字の読み書きができないから、だからどうしても読み書きを習いたかった。今は喰うに困らないから、仕事も昼だけにして、入学したんだ。

兄弟5人の3番目です。父は兵隊に行つて亡くなった。母は子どもを連れて糸満に逃げる途中、背負っていた一番下の弟とともに、鉄砲の弾で首を切られて亡くなった。自分は5歳で何にも覚えていない。

姉から、あんたは泣き虫で、隠れていた壕で泣き出して、周りの人たちから敵に見つかるから「捨てる、捨てる」と迫られて、仕方なく下の弟と一緒に一度外に出て、後から拾ったんだよと聞いた。戦争で何もかも失ったので、両親の写真1枚もなく、どんな人だったかも知らないんだよね。

5歳のとき子どもが4人いる人に子守りとしてもらわれた。5歳が3歳の面倒をみるんだよ。無理なことばかりだった。

8歳からは豚、ヤギを養い、木も倒し、芋の作付けから収穫まで全部やり、良い芋は首里まで売りにいく。

学校の先生が「小学校だけは行かせなさい」と何度か来てくれたので、一度子どもをおぶって学校に行ったら、背中でウンコをもらして、みんなに「臭い、臭い」と言われ、先生から

は「外に行け」と出されてしまった。学校はこの時1日で終わりです。

もらわれていった叔父さん叔母さんたちは、メリケン袋でパンツやシャツを作って履いていた。でも「子どものお前にはいらん」と言われ、自分は13歳までパンツを付けたことがないよ。道で会う男の子どもたちから、「〇〇子は裸だろー」と着物をめくられ、相当哀れをしたよ。

我慢のしどうしだったけど、9歳の時その家の7歳の娘が、“ひばり帽子”という白い帽子を買ってもらったのを見て、ほしくて悔しくて泣いてしまった。自分は裸足で首里までも歩いて行商をしているのにと、養っていた豚とヤギにエサをやらなかった。怒られてさー、「お前なんかヤギ小屋で寝ろ」と小屋に叩き込まれた。そうやって何日も眠った。

叔母さんが農業ばかりしていても声をかけてくれて、古着屋の女中になった。この時、13歳で初めてパンツを履いた。毎月の貯金がB円（通貨として流通したアメリカ軍発行の軍票）で3円ぐらいだったはず、生まれ島に帰るために貯めておきなさいと、隣家の女中の姉さんから教えられて甕の中に貯金してしていたら、ちょうど1年経ったところにそのお姉さんに盗まれてさあ、その人を探しに行ったけど、いなかった。いまだにその姉さんの名前を覚えているほど、ショックだった。

沖縄の言い方でウスミジ ヌディ クラスン（海水を飲んで生きてきた＝大変に貧しいことのたとえ）という言葉があるけど、ほんとそうだったよ。その後、弁当箱作り、半年ほど洋裁も少ししたけど生活できないから、17歳で刑務所の食事作りもし、19歳からは水商売を。昼は昼で何かしら働いてきた。

海洋博の時は、腹巻に円とドルを詰め込んで本土からいろんな人が押し寄せ、自分らですら見たこともないほど儲かった。店のマスターも、がんばればがんばるだけの成果を支払うという人だったしね。一晩働いてサイフに入りきらない日もあったからね。

その後自分でおでん屋、弁当屋もやりました。夫は酒タバコをやらないやさしい人でしたが若くて亡くなったので、2人の子どもは商売しながら1人で育てました。

夜間中学に入ってから、銀行に初めて1人で行った。昔は代書屋がいたからよかったけど、いつもは娘についてもらっていたので怖かったけど、勇気を出してさ。銀行の人が、自分で名前、住所を書けるようになってからびっくりしていたよ。以前は人前で何か書くなんて、びくびくして手が震えるだけだったから、きれいには欠けないがまずは書けるようになった。だから夜間中学に行っていると教えたら、半年で書けるんだとさらに驚いていた。

学校は楽しい。字を少しずつ覚えていくし、漢字も書けるようになっていくと思う。6年は通わないとダメだろうけど。でも、日本語の時間に書いた「古い記憶」は恥だらけで、あわれで涙が出てくるので、書くのはいやだなあとも思う。友だちも出来て、授業の前にみんなとお茶を飲みながら持ち寄ったあれこれを食べながら、ユンタク（おしゃべり）するのが楽しみなんだよね。



* 無学なままのこの 60 年間は真っ暗だったんだ

◆Y・Tさん(女性 1941 年生まれ)

お昼のラジオを聴いていたら、戦争で学校へ行けなかった人の学校があると言っているんです。エンピツが間に合わなくて電話もわからん、学校の名前もわからん。その後もラジオを聴いていたけど、その 1 回だけしか放送しないわけ。役所に問い合わせたら「自分で調べなさい」と言われたけど、調べきれんのです。

そこで役所の救済を受ける課に行ったら話をしたら義務教育課だと教わって、やっとここ(珊瑚舎)が与儀にあると分かったんです。

68 歳まで無学できました。戦争で父は兵隊に行き、それっきりです。母は私が 5 歳ぐらいの時に弾で死にました。兄弟がいたような気もするのですが、記憶にないです。まったく 1 人でした。そばにいる大人をお母さん、お父さんと呼んでくっついて歩きまわっていたのです。

その後、孤児院にも入れず、10 年近く 7、8 名の育ての親というような人たちに引き回されました。今思えば、小さいながらも労働力として、あちこちをたらい回しにされたんです。久米島にも行きました。名前もサチコ、ヨネコ、サチエ、ヨシエとその親ごとに名前を変えられ、自分の本当の名前を忘れそうでした。それでもいつか、だれかが学校に行かせてくれるだろうと思い、必死で働いたんです。

でも 10 歳のころ、誰も学校にやってくれないと分かったときは、悔しいというか残念で、首が横に曲がってしまうほどでした。その時の育ての親は、この子は何で急に首が曲がってしまったのかと不思議がるのですが、自分の気持ちを打つ明けることなんてできません。

カマボコ屋で働くようになりました。イラブチャー(ブダイ)やサバを使って作ります。一番大変なのは氷運びです。2 メートルもある塊を運ぶのは苦労ですよ。また、アチコーコー(熱々)のカマボコを頭に乘せて売りに行くのですが、熱すぎて頭が禿げてしまいます。

糸満から歩いて那覇まで来て、「石川行き」の「川」の字だけ分かるのでバスに乗ったら、コザ十字路まで行ってしまい、そこでカマボコを売り歩いたこともあります。カマボコ屋のお姉さんにひらがな、カタカナの 50 音図を書いてもらい、一緒に声を出して覚えました。「あいうえお かきくけこ」はもちろん「あかさたな はまやらわ」もまだ言うことが出来ます。でも漢字は難儀でした。

結婚してからですが、どうしても運転免許を取らなければならなくなり、2 年かかって 5 回目を受かったんです。漢字が多くて意味が分からず、立ち往生しいしい頑張りました。5 回目は一番早くできてうれしかったですよ。

子連れで魚売りの商売をしていた時、子どもを道端で寝かしていたら、「子どもを預けなさい」と言われ、初めて保育園を知りました。よそ様は何万もする時、私は三千円でしたから、一番貧しいランクだったはずですよ。

30 年くらい前、どうしても学校に行きたくて、役所に相談に行ったら弁護士のような人がいて「自分で勉強しなさい」と言われました。小学校に入学もしていないのに「アキサミヨー(とんでもない)」と思ったけど、どうしようもないので、本屋に入って初めて辞書というものを知りました。

言葉で行っても通じないかもしれないけど、無学ということは暗闇、真っ暗ということなんだよね。やるべきことは必死に努力してみんなやってきた。人間として、しそこなっているのは学校に行くということだけなんです。もの心着いてから、そのことが苦しい。こんな哀れは残るんです。10歳から待っているんですから。

入学が決まったら子どもたちも喜んでくれたね。息子はアキサミヨーと笑い、娘は帳面やバインダー、下敷きなど全部用意してくれました。

入学式もうれしかった。ご馳走があんなに出ていっぱい食べたよ。カチャーシーを30分も踊ったのは自分へのお祝いだからね。校長先生に「お父さん」って言ったら、「そんな大きな娘はいないよ」って言われた。でもね、今生まれた、初めて7歳になったんだという気持ちなんだよ。字をゆっくりでもいいからきれいに書くのがうれしい。ほんとううれしい。

昨日理科で台風と温暖化について習った。漢字が難しいけど、カナをふってあるから大丈夫。それだけ無学のままのこの60年間は真っ暗だったんだ。



* 両親、祖父母、姉の5人がマラリアで亡くなりました

◆ T・Sさん(女性 1940年生まれ)

夜間中学のことはテレビのニュースで3年くらい前から知っていました。行きたいと思ったのですが、仕事をしていたので無理でした。去年の11月に仕事を辞めましたので決心しました。テレビでは年配の方が多かったので、どんな内容か知りたかったですね。

昭和15年生まれです。太平洋戦争が始まった年に八重山で生まれました。敗戦の時は4歳でした。両親、祖父母、姉の5人が、戦中にマラリアで亡くなりました。日本軍によって山に疎開させられてマラリアにかかったのです。でも、記憶はほとんどありません。一番上の兄は兵隊に行っていたので、戦争が終わった時に家に残っていたのは5歳違いの兄と私だけでした。近所のおばさんたちがお粥を恵んでくれて、何とか生き延びてきました。

戦後、ちょっとして長兄が帰ってきましたが、すぐ台湾に行き、そこで結婚して子どもを連れて戻ってきました。次々と子どもが生まれ、私はその子たちの子守りが一番の仕事でした。6、7歳で両手に2人、背中に1人をおぶって家事をこなしました。

長兄は夜遅くまで行商をしていましたから、暗くなると泣き止まない子どもをワジワジ(イライラ)してつねったりしました。子どもが子どもの面倒をみるわけですから、背中の重みに耐え切れず何度も泣きました。それでも小学校は休み休みですが通いました。

次兄は10歳ぐらいの時に、漁師のところに年季奉公に出されました。半農半漁の家で泳ぎを特訓させられ、出来ないと權で背中を叩かれ、畑のキツイ作業も人並み以上にやらされたとか。大きくなっても長兄に対して、金で売られたという憎しみは消えませんでした。

私も12歳からは一人前の大人扱いでしたから、中学校は行けるとも思いませんでした。畑仕事、何里も歩いての薪集め、田植え、豚を養う、みんな私の仕事でした。15歳ごろは、魚の行商もしました。頭にバーキー(平ザル)を乗せ、魚を入れていくつもの字を売り歩くのです。バーキーを降ろしても重さで首が動きませんでした。帰りには豚のえさの芋カズラを背負って戻ります。

まかない

17歳の時に近所の鯉節工場の賄をし、いずれ本島に行くための貯金を始めました。兄

に世話になっていることが重荷で、小さくなって暮らしていました。人の世話になって生きていることがたまらなく苦しかったです。学問がないのでほとんど肉体労働です。小さい頃から働いているので、仕事をキツイなどと思ったことはありません。護岸工事の現場やアスファルト張りの仕事もしました。

18歳で沖縄本島に来ましたが、知り合いもないので食堂の住み込みになりました。朝8時から夜中の1時、2時まで働かされましたが、そういうものだと思っていました。しばらくして間借りをした時は、うれしかったです。トタン葺きで板張りでした。そこに泥棒が入った時はショックでした。

24歳の時に結核と診断されました。自分の体を気遣う余裕なんてなかったし、病気の知識もありませんでした。若いから何とかなると、食べ物も腹が満たされれば良いと思い、栄養のことなど考えたこともありません。家はない、親はいない、自活するしかないのです。

毎日ボーッとばかりいて、足が那覇の波の上に向かい、行ったり来たりを繰り返すばかりです。そのころの波の上は自殺の名所でした。自殺したら新聞に載るだろうか、どうやって死ねばいいのかということばかり考えていました。結局、八重山に戻り入院しました。

当時は結核の治療費はただでした。それでも迷惑をかけているかと思うと早く出て働きたいとばかり思い、先生に一番早く治る治療を頼み、手術をしました。1年で退院しました。

これからの人生を考えて、誰でもいいから結婚しようと決め、相手も選ばず結婚しました。相手は酒飲みでバクチが好きな人で、独身時代の苦労とは比べものにならない苦労をしました。漁師でしたが、人に使われることを好まず、私が借金して船を買いましたが、仕事はしない、借金を返すことなど考えない人で、家庭を持つような人ではありませんでした。今でいう家庭内暴力はむろん、数々の問題を抱え込むことになりました。私が最初にした借金を返すまでに20年かかりました。その借金を返して離婚しましたが、長い長い20年でした。子どもは3人います。3人ともゆがまずに育ててくれて感謝しています。

字を書く以外の仕事なら何でもOKです。字を書けないというコンプレックスは一生ついて回ります。独身時代、学問のなさを何とかしようと「女性教養講座」の通信教育を申し込みましたが、送られてきた教材を見たら難しくて、字が読めません。漢字にフリガナなんてしてありませんしね。それは諦めましたが、それ以来、新聞を取り続けています。分からない字は辞典でひくようにしていますから、何とか読むことはできますが、書けません。

一番長く続いた仕事は病院の付添婦です。経験があるから講習を受けてヘルパー二級の資格も取りました。ただ、そうなると各家庭に派遣され、申し送り状を書かなければなりません。ひらがなしか書けない私にとって、それは本当に大変なことで、肉体労働のキツサなんて比べものにならない苦しみでした。字をすらすら書けるようになりたいのです。

夜間中学はいいですよ。楽しい。小学校時代の記憶には、学校が楽しいなんてありません。学ぶことがこんなに楽しいなんて自分でも驚きです。子どもたちも今の私を喜んでいません。算数の計算が好きですし、英語も覚えてきたら楽しみになってきました。看護の仕事は基本的に1人ですが、学校は大勢の友だちができるし、会話もできてうれしいです。

